只見短歌会　令和八年一月詠草

目黒　富子

ペンギンの如き歩みで除雪しぬ腰を伸ばすは時長かりし

関谷登美子

世話受けし知人友人心しつ交流ならず年の瀬迎ふ

立花　奏音

雪深く除雪の音に三歳児白きを追ひて声の弾むも

新国由紀子

冬の日の陽だまりの中老い猫は香箱座りでひねもす過ごす

渡部ヨリ子

老眼鏡かけてパソコンに向ふわれ自筆の手紙の漢字浮かばず

只見俳句会　一月定例会

一　恵

やんちゃ子や背すじ正してお書き初め

奇声あげ遊ぶ児童や雪下ろし

信

豪雪の記憶も遠くなりにけり

ラグビーや青なる空のノーサイド

真理子

焼きいもに適(かな)う本降り雪の窓

熊眠る雪山靄に包まれて

都

初電話ぜひ会いたいと有頂天

ポケットにあめ玉一つ子のコート

礼

新玉や四囲の山々名をもちて

鈴の音の腕を伝うる初詣

味代子

寒菊や耐える一輪淋しけれ

悴(かじか)みて亡母の手ぬくき風の中

修　一

松過ぎや賀状最後と友のあり

二百年仏守りて鏡餅